

NIBF

公益財団法人 日本舞踊振興財団

Information

No. 54

2018 SUMMER



公益財団法人 日本舞踊振興財団

〒162-0065 東京都新宿区住吉町 10-8 片桐ビル 301

TEL・FAX：03-3354-5496

<http://www.nihonbuyo.or.jp>

E-mail: office@nihonbuyo.or.jp

目次

- ◆名手訪問／対談 東音 宮田 哲男
〈重要無形文化財(長唄・唄)保持者〉
- ◆「印度の魂 日本的心 真夏の宵の競演」
- ◆日本舞踊誌上講座／日本舞踊の歴史を振り返る⑩
東京大学名誉教授 古井戸 秀夫
- ◆役員会等の動き、役員等名簿
- ◆平成 29 年度 正味財産増減計算書
- ◆特別会員ご芳名
- ◆NBF 活動報告・行事予定・編集後記

名手訪問

《対談》

●東音 宮田 哲男 〈重要無形文化財(長唄・唄)保持者〉

●西川 扇藏 (公益財団法人日本舞踊振興財団理事長)
[敬称略]



(於:西川扇藏稽古場)

西川 お久しぶりでございます。今日は先生のこれまでの色々なお話をお聞かせ願えればと思っております。

先生は幼少の頃から長唄に親しまれていたのでしょうか？

宮田 私の父が歌舞伎や常磐津など邦楽が大好きでした。姉も踊りを習っておりまして、お師匠さんが家へ出稽古に来ていました。その稽古の音を聞いていると、私は「黒髪」や「梅にも春」などその曲をすぐ覚えてしまうんです。そうしているうちに、長唄の杵屋六左衛門さんの派の杵屋六吉栄さんというお師匠さんの所へ姉が稽古に行くことになり、一人で行くのが嫌だから一緒に行ってくれということで、私も嫌いではないので、稽古について行っていたんです。終戦後のことで、お師匠さんが長唄では生活ができず、芸者にでることになって、そしたら熱心に通ってくる中学生がちょっと邪魔になったようで、「あなた稽古すれば名人になれるかもしれなしから、もっと良いお師匠さんにつ

きなさい」と言って、体よく断られてしまいました。

私は北海道の札幌生まれなものですから、何とか東京の大学に行きたいと思っていました。北海道では早稲田が人気だったので、そのことを父親に言いましたら「北海道には北大という大学があるじゃないか、東京なんかに行くことはない」と却下されて、そのうちに私の高校の学友が、藝大の美術部を受験するのに入学案内を取り寄せたのを見せてもらったんです。そしたら音楽学部にも長唄の科があるのを知りました。もしかして長唄で藝大を受験するのは親が許してくれるのではないかと、父にそのことを言ったら「そんなに好きならやってみろ」と私の父も絵描きなもので藝大を知っており、音楽学部ならばということ、受けることになったのですが、それにはやはりきちんとしたお師匠さんに習わなければいけないということになりました。すると私の姉の嫁ぎ先の母親が、素晴らしいお師匠さんがいるからそこに紹介してあげると

言ってくれ、それが稀音家浄観先生の高弟で、稀音家六幸治というお師匠さんだったんです。それでそこへ入門しまして、とにかく藝大を受けるということで特訓を受けたのですが、受験する2年前だったものですから、間に合わないんです。当時、唄の課題曲が「吾妻八景」、三味線が「鞍馬山」だったんです。それで受験曲のレコードを借りまして、毎日擦り減るほど聞いて、「吾妻八景」はそっくり唄えるようになったんです。自由曲は「外記猿」という曲を選び、受験しました。「吾妻八景」はそっくり唄えたものですから点が良かったのですが、「外記猿」の方はうまく唄えなかったので、見事に合格ということにはならず、そしたら当時長唄の主任教師だった山田抄太郎先生という方が、「あの子はひょっとすると、ひょっとするから、とにかく入れておけ」ということで、お情けで入ったんです。入ってからはとにかく一生懸命やりました。当時はテープなどはないものですから、とにかくお師匠さんの稽古場に行って朝から座りっぱなしでした。聞いて覚えるより仕様がないうえから。今は見台の前で習わなくてもテープで覚えるような若い人が多いです。でもそれではやはり伝わらないんです。舞踊でもビデオで覚えるだけでは踊れないと思うのですが。テープで節だけ覚えると出来たように感じてしまうんですね。それでこれからの人が育っていくのか、ちょっと難しいなと思ってるんです。

西川 上手な人はどんな人ですか？と色々な人に聞かれるのですが、「そういう人は大抵、先生のやっている通りのことをできる人」だと答えています。全く同じようなことが長唄にもいえるのですね。

宮田 そうですね。声の色とか情感とか。そういうのは直接教わらないと、なかなか曲が生きてこないんです。生きた唄にならないものですから。その辺がこれから心配です。今は皆、簡単に覚えて唄ってしまっていますからね。

西川 山田抄太郎先生との思い出を教えてください。

宮田 藝大時代はレッスンが終わり山田先生をご自宅までお送りするとその場で唄の特訓をして下さいました。先生は三味線が専科でありながら唄も大変お上手な方で稽古を受けながらしばしば陶然とさせられましたのを覚えています。その後山田先生が作曲した「黎明」をNHKで放送する際には異例の抜擢を頂きました。「黎明」出演後は仕事のオファーも多く来るようになり、お琴でも平井澄子さん作曲の「切支丹道成寺」を演奏しました。それを中村歌右衛門さんが聞いて感激して下さい、それから歌舞伎で演奏したりもしました。その他にも山田抄太郎先生の稽古場の唄指導代稽古を任せて頂くなど、数々のご恩に報いる一心で修行を重ねて参りました。



西川 長唄の他になかった職業などはあったのでしょうか。

宮田 それは特になかったです。唄一本です。藝大では素晴らしい先生ばかりでした。

西川 東音会の創設などについて教えてください。

宮田 昭和32年私が藝術大学大学院を卒業した時は他流派の名取にならないければ演奏活動、放送など一切出来ない時代でした。当時主任教授だった山田抄太郎先生が「東京藝術大学長唄科の卒業生を中心とする長唄研究会(長唄東音会)を

お作りになり、各流派、新聞社、放送局など関係各方面に「長唄新団体設立の目的」趣意書を送付し、今後卒業する人たちの研鑽・演奏活動に対する拠点を与え、従来の稽古師匠にとどまらず演奏家としての地歩を築いて下さいました。夜を徹し趣意書を写書しながら暁を迎えた熱い思いが今も鮮明に思い返されます。

東音会は長らく本名で活動して居りましたが、門弟たちからの資格希望の問題、地方の仕事に後輩を連れて出演した時に、素人を並べたような誤解を受けることが間々起こり、平成8年より本名の上に東音を冠する事に成りました。

西川 今まで「夢の富」や「重盛屏風」「七騎落」など私が作った多くの作品で一緒にさせていただきました。

宮田 そうですね。私が藝大に入学した時、新入生は唄は私1人、そして三味線は杉浦さん、今は亡き杵屋五三吉さんの2人だけでした。それで自然にコンビを組むようになり、卒業後も東音会でコンビを組んで仕事をするようになったんです。それで西川先生のリサイタルでも演奏させていただくようになり、先ほど先生が仰った作品の他にも「瓜盗人」や「法然と阿修羅」などいろいろ演奏させていただきました。

西川 演奏会と舞踊会で唄い方の違いなどはありますか？

宮田 やることは一緒なんですけれども、やはり舞踊家さんが引き立つように演奏するように心がけています。演奏の場合はテンポが速いことが多いのですが、舞踊家さんは踊りの雰囲気を出すので、テンポがゆっくりになることが多くあります。ゆっくり唄うためにはそれに応じた声の使い方もあり、演奏会とは違う点です。

西川 そのような気配りのおかげで私達は気持ちよく踊ることができるんですね。古典の曲と創作でアプローチの仕方

が違うことなどはあるのでしょうか。

宮田 創作は作曲者の意図に従って、演奏しなければいけません。古典の場合は古典の雰囲気を出す。型を崩さずに情感を出すというようなことを心がけています。

西川 声を出すということについて日ごろから気をつけていることはおありですか？

宮田 深呼吸で息を深く吸うということは心がけておりますし、普段からお風呂に入っているときは発声練習をしています。長唄の声のトレーニングは、低い音から高い音までを出すという練習を何度もやるのですが、これをお風呂でやっています。「君が代」を唄っていたこともあります。以前は110キロくらいあって、紋付で出かけるもので相撲協会の人だと思われていたこともあったようです（笑）

西川 様々な受賞経歴がありますが、一番記憶に残っている受賞と作品について教えてください。

宮田 平成2年～平成10年に、杵屋五三郎・稀音家康他による長唄全集159曲を独吟にて収録した「長唄の美学」（NHKCD全集）を完成させた後、64歳で重要無形文化財の指定を受けましたことですね。

西川 最近お子さん達は日本の伝統芸能を習うということが少なくなってきていて、日本舞踊も例外ではないのですが、長唄はどうでしょうか。



宮田 そうですね。子供さんが来るというのはいらないですね。高校生が藝大を受験したいということで稽古に来ることは多いです。

西川 長唄の普及発展に向けて行っていることを教えてください。

宮田 昭和61年から、自分の演奏会を毎年やっております。やはり聞いて、長唄に興味を持っていただくということでしょうか。聞く機会がなかなかないですから。区の行事で小学生に長唄を教えるということをしたこともあり、実際に三味線で「さくらさくら」を弾かせたりしました。初めてでも今の若い子は音感が良いので弾けたりします。そういうことを続けていくのも大事だと思っています。



西川 後進の育成についてはどのようにお考えでしょうか。

宮田 やはり古典に忠実に、型を崩さず、けれどもその中で今の時代に合うような唄い方というのに努めて指導しています。弟子が忙しいものですから、なかなか稽古に来ないんです。昔は稽古に来る人が大勢いて、稽古だけで生活も成り立っていたんですけども、今はなかなかそうはいきません。藝大の卒業生は皆、歌舞伎に出て生活をしている人が多いです。ただ歌舞伎に出ると一ヶ月同じ唄を唄っているわけですから全然勉強をしないんです。その辺がネックですね。通ってくる専門家の弟子には「きちんと見台を挟んで稽古をしないと伝わらない」ということを厳しく言っています。稽古を大事にする人は確実に上達します。四谷区民センターでは女子東音の人たちに講習・指導をしています。

何の芸事でも同様ですが、先生から受けた教を克明に如何に永く記憶にとどめて精進するかが道を究める決め手と思っております。

西川 私も本当にそう思います。本日はありがとうございました。

東音 宮田 哲男氏 プロフィール



昭和9年 北海道札幌市に生まれる
 昭和25年 稀音家六幸治師入門
 昭和28年 東京藝術大学音楽学部邦楽科に入学
 昭和32年 東京藝術大学大学院研究科に入学
 長唄東音会創立に同人として参加(現在に至る)
 昭和63年 文化庁芸術祭賞受賞
 平成元年 芸術選奨文部大臣賞受賞
 平成10年 重要無形文化財保持者(人間国宝)に指定される
 平成12年 紫綬褒章受章
 平成15年 日本芸術院日本芸術院賞受賞
 平成26年 旭日小綬章受章
 平成27年 日本芸術院会員就任



『ラーマーヤナ』

7月3日(火)に国立小劇場にて当財団としては久しぶりの主催公演「印度の魂 日本的心 真夏の宵の競演」を開催しました。昨年一昨年とインド、ニューデリーにて行った公演の凱旋公演であり、演目は昨年インドで上演した『羽衣』『三番叟』『ラーマーヤナ』に加え長唄『新曲浦島』を上演しました。

今回の公演はインドより、シタール演奏家のファター・アリ・ハーン氏、タブラ演奏家のアーマン・アリ・ハーン氏、カタックダンサーのサンギータ・チャタルジー氏の計3名を招聘しました。そして-共催-(一社)五耀會、-協賛-エア・インド、-協力-和遊の会、(独行)国際交流基金、-後援-(公財)日印協会、外務省、-助成-東京都歴史文化財団<アーツカウンシル東京>と多くの皆様のご協力を得て開催

いたしました。

6月6日には在日本インド大使館にて記者会見を行いました。非常に現代的で綺麗な会場でした。桂吉坊氏のナビゲートで進行し、五耀會の先生方が今公演開催へ至るまでの経緯や各演目の見所を説明した後、記者の方々からの質疑応答、最後にフォトセッションを行いました。

本番1週間前の6月27日にインド人アーティストが来日しました。

28日は朝からスケジュール等の打ち合わせを行い、その後インド人アーティスト達は日本の古典芸能の為の舞台を見た事がないという事だったので、国立劇場へ案内し、会場の雰囲気を感じてもらいました。

翌29日は午前中、日印ミュージシャン達と



「アーマン氏 ファター氏」

脚本・演出の藤間蘭黄氏で音楽の打ち合わせを行いました。そして17時半よりレセプションをキャピタル東急ホテルにて催し、五耀會の先生方、インド人アーティスト3名、日本人演奏家を囲み、和遊の会の方々、(公財)日印協会の方々等にお越し頂き、インドでの公演の映像をご覧頂いたり、出演者がそれぞれの意気込みを語ったあと、懇親の時間となり、大いに盛り上がりました。

レセプションの後も、五耀會の先生方は場所を移し、『ラーマーヤナ』の稽古となりました。台本や舞台図を見ながらの確認作業、そして今回の公演のための新たな演出の創り込みが行われ、白熱した稽古は深夜にまで及んだとの事でした。

6月30日は10時より国立劇場中稽古場にて、インド人アーティストを交えての稽古が開始され、昼休憩を挟み、21時まで続けました。昨年の公演VTRを見ながら、音の確認、お互いの動きを確認しました。通訳を介するため、少々難儀するのではと心配しましたが、やはり過去二回の公演と一緒に作りあげていること、そしてアーティスト同志国境は関係なく通じ合うものがあるようで、心配は杞憂に終わ

りホッといたしました。

7月1日は場所を変え、新宿村スタジオでの稽古が午後から始まりました。NHK『にっぽんの芸能』のコーナー、旬の話題「みみより」にて取り上げられるため(8月3日放映予定)カメラが入り、稽古の様子を撮影していました。

インド人アーティスト3名が稽古場入りする前に、『新曲浦島』の稽古、到着後すぐに、『ラーマーヤナ』の昨日やり残した後半部分を確認しながらの稽古となりました。休憩を挟み、『三

番叟』、『羽衣』の稽古、そして最後に『ラーマーヤナ』を始めから通して稽古をしました。午後、集中して稽古を行い、19時に解散となりました。

翌2日は、国立劇場の大稽古場にて、本番の舞台の寸寸通りの広さをととの稽古となりました。11時から始まり、まずは邦楽チームとの打ち合わせ、『新曲浦島』、『三番叟』、『羽衣』『ラーマーヤナ』の抜き稽古を行い、18時より通し稽古が始まりました。通してみても気付いた点などの修正をし稽古を終えました。

いよいよ本番。今年は関東甲信地方は観測史上最速6月29日に梅雨明けし、インドに負けず暑い日となりました。



「平松大使よりご挨拶」

出演者の皆さんは11時に楽屋入りし、舞台装置や今回『ラーマーヤナ』の作中で使用する映像の確認、居処合わせの後、舞台稽古となりました。

ナビゲーターの桂吉坊氏のトークを挟みながら、セリや盆などインドではなかった舞台機構に気をつけながらの稽古となりました。舞台での通し稽古を無事に終えると、出演者一同から少しの安堵と、本番へ向けて頑張りましょうという一体感・気合を感じました。

18時に開場すると、続々とお客様が来場されました。今回の公演に、共催、協賛、協力後援、助成と様々な形でご助力頂きました方々も沢山お越し下さいました。

公演を開始するにあたり、まず初めに、プログラムにご挨拶文を頂き、またインドより駆け付けて下さいました、駐インド日本国特命全権大使 平松賢司様よりご挨拶を頂戴いたしました。

そしていよいよ『新曲浦島』の幕が上がります。まず五耀會の先生方の息の合った古典をご覧頂きました。

続いてファテヘ・アリ・ハーン氏によるシターとアマーン・アリ・ハーン氏によるタブラの演奏、花柳寿楽氏、サンギータ・チャタルシー氏との『羽衣』は、日本で見慣れている天女の像とは全く異なる役作りで興味を引きました。途中から片足100個ずつ、それぞれ1キロにもなる鈴を足首に巻きつけて踊る姿からは女性の強さと悲哀の両方を感じました。花柳寿楽氏との二人の姿が美しく、新しい『羽衣』をご覧頂くことができました。

次はアマーン氏によるタブラのみの演奏、西川箕乃助氏、花柳基氏、山村友五郎氏による『三番叟』でした。タブラのリズミカルな音色と五穀豊穡を願う三番叟の動きが見事にマッチし、とても楽しい躍動感に溢れた舞台でした。

そして休憩を挟み、いよいよ『ラーマーヤナ』が始まりますが、その前に、日本では馴染み

がない話のため、桂吉坊氏が、わかり易くあらすじを解説して下さいました。昨年のインドでの上演との違いは、カタックダンサーの群舞がないことでしたが、演出を変えた今公演では人数が減ったことを全く感じさせることなく、戦いのシーンなど迫力満点で緊迫感に満ちた場面となりました。全7巻4万8000行にも及ぶインドの叙事詩が映像も駆使しながら約50分の作品に集約され、インドと日本の音色、カタックダンスと日本舞踊が見事に融合した素晴らしい舞台となり、皆様に披露することができました。

最後の幕が降りても拍手は鳴り止まず、カーテンコールが行われました。国立小劇場の客席は熱気に包まれ、興奮冷めやらぬという表情で皆様帰路につかれました。

終演後、舞台にて、当財団理事長西川扇藏・平松大使ご夫妻と出演者一同にて記念撮影をしたのち、理事長よりお礼のご挨拶があり皆で乾杯となりました。一昨年、昨年、今年と3年間の集大成として最高の舞台を作り上げることが出来、出演者、関係者全ての人々が達成感に満ちていました。

3年間続いたインドとの交流によって得た経験はとて大きく、海外で日本舞踊を紹介するという今までの形式から、更に一步踏み込み、お互いの国の芸術を理解し、共に作品を作り上げていくという新しい方向性を見出すことが出来ました。

今回の経験を糧とし、これからも各国との交流を図り、日本舞踊を世界へと発信してまいりたいと思います。



『新曲浦島』



『羽衣』



『三番叟』



「カーテンコール」



「終演後理事長を囲んで」

隅田川物の系譜 ⑦

東京大学名誉教授
古井戸 秀夫

徳川幕府が瓦解すると、その翌年、宝生流の日吉吉左衛門の「吾妻能狂言」がはじまりました。長唄や踊りのお祝い会のように、誰でもが見ることのできる、能の興行を目指したものでした。はじめは役者も囃子もみな本物の能役者だけでしたが、一中節の三味線を入れたところ話題になり、ついには地方を三味線にする新しい能の形式が生まれることになりました。将軍や大名の家来であった能役者が三味線で舞い、踊る時代がやってきたのでした。

そのうち『隅田川(角田川)』だけは、長唄と清元と二曲ができました。長唄『角田川』の節付けは馬場の鬼勝こと二代目杵屋勝三郎。囃子の作調は藤舎芦船、この人はもと能の観世流の太鼓方でした。清元『隅田川』には流儀の双壁と呼ばれた菊寿太夫。三味線は彦次郎、ツレには梅吉も出ていました。ともに家元延寿太夫を支える人たちでした。

吾妻能狂言の『隅田川(角田川)』には、長唄にも清元にも「乗合船」という小書きが付きました。「乗合船」にはワキツレの旅人(商人)のほか、神子・座頭・角兵衛獅子、この三人が乗り合わせます。狂言方が扮するこの三人がそれぞれが仕抜きで踊る、常磐津の『乗合船』の趣向を詰め込んだものでした。このような賑やかで派手なところが人々の心を捉えたのでしょう。それも一時で、物珍しさがなくなると自然と消えてしまいました。

清元の現行曲『隅田川』は、その反動だったのでしょう。踊りの付かない素浄りとして、謡曲ほんらいの姿に戻そうとする試みでした。主催者で台本を拵えたのは条野採菊。江戸生き残りの戯作者で東京日日新聞(現在の毎日新聞)を創刊した実業家でもありました。採菊はワキツレの旅人も削除、船に乗るのは狂女と船長。音曲を堪能するためでし

う、採菊は下谷竹町の自宅でこの曲を聴きました。明治16年3月のことでした。清元の太夫は菊太夫こと二代目菊寿太夫。作曲は三味線の二代目梅吉。二人とも吾妻能狂言に係った師匠の名を継ぐ後継者でした。

歌舞伎座の幕内部長であった木村錦花は、「この曲は鹿島清兵衛が全盛の時代に、木挽町玄鹿館の楼上で、お葉の唄、梅吉の三味線で、唄開きをしたのが始まり」(『近世劇壇史-歌舞伎座篇』)としていますが、玄鹿館の竣工は明治28年ですので、「唄開き」というのは何かの間違いでしょう。玄鹿館は二階建の洋館でエレベーターも付いていました。写真を撮る「写場」は廻り舞台になっていて、團十郎でも菊五郎でも、この写真館で撮影することができました。そのような写真館で清元の名人お葉が歌うというので話題になったものだったのでしょう。

この曲に踊りの振りを付けたのは、藤間政弥でした。明治39年、歌舞伎座。政弥自身の名披露目の会でした。振付の方針は、「心持は十分にお能を生かして、振りの上で歌舞伎にする」というものでした。具体的に言うと、「長唄の「賤機帯」は踊れます。踊って狂女になれますが、この曲は踊っては狂女になれません」。さらに「梅若丸の事がいつも頭から去らない。ここが「角田川」の狂女」なのだと言いました。世阿弥が『花鏡』で説いた「動十分心、動七分身」(心を十分に動かして、体の動きを七分に抑えなさい)と同じ考えでした。踊りではなく動く。その動きに三つか四つの幼い子供の足取り使ってみると、体中の力が抜けて「フヌケ」のようになり、我が子のことばかりに神経が集中する狂女になるのだというのでした(松本亀松著『藤間政弥』)。

歌舞伎の初演は、二代目市川猿之助のちの猿翁でした。猿之助は清元の家元、高輪

の五代目延寿太夫の直門でした。それ故、十五代目羽左衛門に薦められて『十六夜』や『三千歳』の山台に乗ったこともありました。その猿之助が大好きだったのが『隅田川』でした。大正8年、外遊から帰った猿之助は、お土産狂言にこの曲を選ぶことになるのでした。幕切れに、「へすいと罫」の船唄を入れたのは、高輪の家元の工夫でした。子供のころ向島に住んでいた延寿太夫は、朝早く起きて白鬚橋の上から朝霞に霞む霊峰富士を眺め、美しい声の船頭が歌う船唄に聞き惚れたものでした。そのときの思い出が役に立ったのです(『延寿芸談』)。二代目梅吉の原曲の幕切れは、「へ梅若塚と後の世に、伝え残るぞ憐れなる」と語り収める、義太夫風でした。延寿太夫はその幕切れも嫌い、劇作家の山崎紫紅が、「へ幻の見えつ隠れつするほどに、空ほのぼのと明けにけり」と書き直しています。和声を用いた節付けとともに、余韻を残すことになりました。

猿之助はロンドンで見えてきたロシアン・パ



レーの群舞を取り入れようとして、8人の群衆を出しました。我が子の幻を追って、狂女は群衆の間を縫って動きました。「日本の舞踊は横だ、縦ではない」と言われたことの反省から、縦の動きを入れる試みでもありました(『猿翁芸談聞書』)。結局、うまく行かず、再演以降は狂女と船長、二人きりになるのでした。幕切れの狂女について、猿之助は「静中動」という言葉を使って、次のように言いました。狂女の動きは静かでも、我が子を想う母親の心の動きがあるのだと(『猿翁』)。ここにも世阿弥の「動十分心、動七分身」に通じるものがありました。

舞台美術は外遊に同行した田中良でした。紺青がかかった水の色、黄ばんだ色調の空、遙か遠くに筑波山がほの見える、詩情豊かな舞台になりました。夜を暗示する照明の青い光は、新舞踊の手法でもありました。写真の中に抽象が溶け込む、新しい舞踊劇の誕生でした。



〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町2-3-14
ツカモト堀留ビル6階

フリーダイヤル 0120-5290-58
ごふくわ いづつや

理事会

開催年月日	議事事項	会議での結果
平成30年3月29日	第1号議案 平成30年度事業計画(案)について	満場一致で可決
	第2号議案 平成30年度収支予算(案)について	満場一致で可決
平成30年5月30日	第1号議案 平成29年度事業報告(案)について	満場一致で可決
	第2号議案 平成29年度決算報告(案)について	満場一致で可決

評議員会

開催年月日	議事事項	会議での結果
平成30年6月15日	第1号議案 平成29年度事業報告(案)について	書面議決により可決
	第2号議案 平成29年度決算報告(案)について	書面議決により可決
	その他 平成30年度事業計画と平成30年度収支予算の説明	

公益財団法人日本舞踊振興財団 役員等名簿

(50音順・敬称略)

■理事長	■理事	■監事	■評議員	
西川 扇藏	青山 幸恭	小山 敬次郎	市川 和雄	鳥越 文藏
	大野 輝康	半澤 進	(市川 團藏)	中村 作二
■業務執行理事	登 誠一郎		内堀 祐子	藤田 洋
西川 均	花柳 寛		(西川 祐子)	藤田 康幸
(西川 箕乃助)	(花柳 壽應)		越智 久男	古井戸 秀夫
	福田 博		景山 正隆	丸茂美恵子
	藤間 高子		近藤 瑞男	(丸茂 祐佳)
	(藤間 勘祖)		龍居 竹之介	
	三隅 治雄		田中 英機	
	水野 豊		田村 直子	
			(西川 扇生)	

平成29年4月1日から平成30年3月31日まで

(単位:円)

科目	当年度	前年度	増減	備考
I 一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
(1) 経常収益				
①基本財産運用益	150,000	165,930	△ 15,930	
基本財産利息	150,000	165,930	△ 15,930	
②特定資産運用収益	16,051	0	16,051	
特定資産受取利息	16,051	0	16,051	
③受取会費	4,880,000	5,070,000	△ 190,000	
普通会費	2,780,000	2,870,000	△ 90,000	
特別会費	2,100,000	2,200,000	△ 100,000	
④事業収益	2,878,400	4,842,600	△ 1,964,200	
青少年に対する舞踊普及事業収益	32,400	931,600	△ 899,200	
舞踊家の海外派遣及び招聘事業収益	0	1,200,000	△ 1,200,000	
在日外国人、留学生啓蒙普及事業収益	0	150,000	△ 150,000	
自主公演活動事業収益	0	0	0	
日本舞踊の新人養成事業収益	288,000	396,000	△ 108,000	
講演会の開催事業収益	58,000	135,000	△ 77,000	
日本舞踊に関する広報活動等事業収益	0	30,000	△ 30,000	
制作協力等支援事業収益	2,500,000	2,000,000	500,000	
衣裳楽器等の貸与事業収益	0	0	0	
⑤受取補助金等	3,293,335	869,080	2,424,255	
受取補助金	406,000	355,000	51,000	
受取国地方自治体助成金	514,080	514,080	0	
受取その他助成金	2,373,255	0	2,373,255	
⑥受取寄付金	0	180,000	△ 180,000	
受取寄付金	0	180,000	△ 180,000	
⑦その他の収益	11,174	182,654	△ 171,480	
受取利息	27	54	△ 27	
受取配当	600	600	0	
受取雑収	10,547	182,000	△ 171,453	
経常収益計	11,228,960	11,310,264	△ 81,304	
(2) 経常費用				
①事業費	9,122,994	9,174,491	△ 51,497	
給料	1,623,611	1,442,484	181,127	
法定福利費	10,464	11,575	△ 1,111	
旅費	0	0	0	
通信費	431,343	69,587	361,756	
消耗品	128,999	211,538	△ 82,539	
印刷製本	83,062	0	83,062	
光熱水借料	5,400	0	5,400	
諸委託	1,178,651	1,178,757	△ 106	
雑費	3,997	3,766	231	
手数料	551,580	646,980	△ 95,400	
手数料	4,603,000	4,608,432	△ 5,432	
手数料	305,480	822,720	△ 517,240	
手数料	197,407	178,652	18,755	
管理費	3,654,529	3,182,167	472,362	
給料	286,519	254,556	31,963	
法定福利費	1,847	2,043	△ 196	
旅費	0	0	0	
通信費	144,946	96,902	48,044	
消耗品	122,620	86,820	35,800	
印刷製本	395,246	297,761	97,485	
光熱水借料	0	0	0	
雑費	165,133	126,547	38,586	
印刷製本	110,160	110,160	0	
光熱水借料	182,276	0	182,276	
手数料	1,534	665	869	
手数料	166,500	90,000	76,500	
手数料	1,200	5,300	△ 4,100	
手数料	0	0	0	
手数料	1,318,680	1,326,580	△ 7,900	
手数料	757,868	784,833	△ 26,965	
経常費用計	12,777,523	12,356,658	420,865	
当期経常増減額	△ 1,548,563	△ 1,046,394	△ 502,169	
2. 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
青少年舞踊普及引当金戻入益	800,000	0	800,000	
経常外収益計	800,000	0	800,000	
(2) 経常外費用				
青少年舞踊普及引当金繰入	2,500,000	0	2,500,000	
経常外費用	2,500,000	0	2,500,000	
当期経常外増減額	△ 1,700,000	0	△ 1,700,000	
当期一般正味財産増減額	△ 3,248,563	△ 1,046,394	△ 2,202,169	
一般正味財産期首残高	118,198,995	119,245,389	△ 1,046,394	
一般正味財産期末残高	114,950,432	118,198,995	△ 3,248,563	
II 指定正味財産増減の部				
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	114,950,432	118,198,995	△ 3,248,563	

日本舞踊振興財団では、特別賛助会員制度を設け、下記の方々にご支援を
いただいております。是非ご参加をお願い申し上げます。

- ◎会費 1口 10万円(1年間)
- ◎特典 会報のご送付
会報・公演プログラム等にご芳名掲載
財団主催イベントにご招待

飯田君子	関根愛子
飯田信子 (飯田不動産 代表)	(株) 瀧川峰晴堂 (代表取締役 瀧川明行)
飯田良枝	東京信用金庫 (理事長 半澤進)
ツカモト市田 (株)	東信企業 (株) (代表取締役 神永和昭)
(有) かつら大阪屋 (代表取締役 長坂誠一郎)	西川井扇
金井大道具株式会社 (代表取締役 金井勇一郎)	(株) 西菱
歌舞伎座舞台 (株)	(株) ビデオフォトサイトウ (代表取締役 海老原利明)
(有) ギャラリー竹柳堂 (代表取締役 藤澤繁)	(株) ホテルオークラ東京 (代表取締役 社長 池田正己)
向陽ビル (株) (代表取締役 鈴木甫沙子)	藪本俊一 (株) 古美術藪本 (代表取締役)
松竹衣裳 (株) (代表取締役 会長 武中雅人)	山本化学工業 (株) (代表取締役 山本富造)
セガサミーホールディングス (株) (代表取締役 会長 里見治)	(株) 吉岡 (代表取締役 清水喜重郎)

◆財団の趣旨にご賛同いただける方は財団事務局までご連絡ください。特別会員について
ご説明いたします。その上でご希望の方には申し込み書類をお送りさせていただきます。
財団事務局 TEL 03-3354-5496

NBF活動報告

- ◆新宿区小学校鑑賞教室
日時：平成30年2月10日(土)
会場：新宿区立早稲田小学校
内容：日本舞踊についてのレクチャーを行い参加者全員によるワークショップ。その後日本舞踊の一部を上演した。
- ◆幼稚園おどり教室
日時：平成30年2月21日(水)
会場：東洋英和幼稚園
内容：幼稚園児及びその保護者を対象として日本舞踊に親しむよう企画した啓蒙活動として行った。
- ◆仕舞・狂言教室合同発表会
日時：平成30年3月15日(木)
会場：西川扇蔵稽古場
内容：一年間の稽古の成果を見せるべく発表会を行った。
- ◆鑑賞の日
日時：平成30年6月12日(火)
場所：東洋英和女学院小学部
内容：小学生及び保護者を対象とし日本舞踊についての簡単なレクチャーを行い、日本舞踊を上演した。
- ◆宇都宮市日本舞踊鑑賞教室
日時：平成30年6月26日(火)
会場：栃木県宇都宮市文化会館
内容：毎年恒例の宇都宮市の児童を対象とした事業。レクチャー・ワークショップ「手習子」「操り三番叟」を実演をした。
- ◆日印芸術の祭典
インドの魂日本の心 真夏の宵の競演
日時：平成30年7月3日(火)
会場：国立劇場小劇場
内容：インドからカタクダンサー、演奏家を招聘し、日本舞踊とのコラボレーションを上演した。

NBF行事予定

- ◆新宿区「こども体験プログラム」-日本舞踊-
日時：平成30年8月1日(水)~3日(金)
会場：四谷地域センター
- ◆新宿区日本舞踊鑑賞教室
日時：平成30年10月4日(木)
会場：新宿区立富久小学校
日時：調整中
会場：余丁町小学校
- ◆第54回講演会
日時：平成31年1月28日(月)
会場：東京信用金庫本店 8階ホール
講師：未定



公益財団法人日本舞踊振興財団 「NBF」 No.54

発行 公益財団法人日本舞踊振興財団
〒162-0065 東京都新宿区住吉町
10-8 片桐ビル301
印刷 株式会社デイエムピー
発行日 平成30年7月

編集後記

暑い夏がやってまいりました。
今年は久しぶりに日本国内での公演を行いました。
冬には国際交流基金主催で韓国にてレクチャーデモンストレーション公演を行う予定となっており、財団では今後も諸外国との文化交流をすすめていきたいと思っております。